

葛西 富夫(かさい・とみお)

1、プロフィール

旧会津藩や新生会津藩の歴史、近代から現代に至る会津人の心や営みを世に紹介し、多くの著書を世に出し、わが国における会津・斗南藩史研究の第一人者と称された。

<生没>

1933(昭和8)年8月2日 ~ 2020(令和2)年1月13日

<代表作>

『北の慟哭－会津・斗南藩の歴史』(昭和55年11月1日・青森大学出版部)

<青森との関わり>

むつ市出身、弘前大学卒業、県内で小中学校教諭、センター指導主事、教頭、校長を歴任した。

2、作家解説

弘前大学教育学部在学中から、会津・斗南藩の研究を続け、各種の資料を歩猟し、各地を調査するなどして、多くの貴重な作品を残した。

その功績を列挙すると、『下北における旧会津藩授産史論究』(弘前大学卒業論文)『斗南藩興亡記』『斗南藩史』『続会津藩の歴史』『ある会津藩士の生涯』『北の慟哭』『会津・斗南藩士』などがある。

また、教育関係者としての著書も、『下北教育史考』『青森県の教育史』の他、共著として、『青森県教育史・全6巻』『下北半島の歴史と民俗』『むつ市教育史』などがある。

自身、『新訂会津・斗南藩史』(平成4年12月発行)の序章で、「飽きもせずに会津・斗南藩の研究を続けてきた」「薩長藩閥政府が華やかに飾り立てた維新の歴史から抹消された斗南藩の歴史を紹介し続けてきた」理由を、下記のように述べている。

1 グローバルな観点に立つと、部分的には世界史に結びつく重要な歴史的対象である。

2 日本史(全体史)に位置づいた地方史(部分史)ととらえることができる。

3 我が国の近代史の重要な歴史事象であるにもかかわらず、未だに解明されない謎の部分が多すぎ、このままでは日本史の流れから永遠に忘れ去られてしまう可能性がある。

4 地方史の観点から言えば、明治以降の青森県の成立過程や政治・教育文化・産業の発達と会津人のかかわりを切り離して考えることは不可能である。

5 会津人の営みを社会科や道徳教育に活用し、生きた学習を続けたい。などの思いがある。

加えて、自身が「斗南会津会」の顧問であること、「郷土史家」がのめり込むお国自慢の発想や貴種権門へのあこがれなどもあったことを否定しないとも述べている。

昭和40年の創刊時から参加していた「うそり」(下北の歴史と文化を語る会編)への寄稿を長く継続し、令和2年1月13日に満86歳で逝去した。

3、資料紹介

○『北の慟哭』

図書

1980(昭和55)年11月1日

220mm×160mm

「明治3年に北奥の斗南藩領に移住して生活に呻吟した会津人の苦闘と共に、その前年に蝦夷地へ移住し、極北の大地に理想郷を築き上げた会津人たちの痛恨の営みを解明し、維新史の一頁に書き加えることに力を注いだ」(著者のまえがきに記載)作品。